

## 第1回 文化振興計画改訂検討会 議事録

日時：平成27年7月29日（水）

場所：北九州市役所 5階 特別会議室A

出席者：井生委員、今川委員、上田委員、江口委員、柏木委員、古賀委員  
近藤委員、椿委員、津村委員、三船委員（10名）

事務局：大下市民文化スポーツ局長、高松文化部長、佐々木文化企画課長  
稗田美術・舞台芸術担当課長、古林文芸担当課長、重岡メディア芸術  
担当課長、福田松本清張記念館管理運営担当課長、川副漫画ミュージ  
アム管理運営担当課長、榎田美術館普及課長、用田企画課長（教育委員会）

### <自己紹介・北九州市の文化のイメージ・強み>

#### 井生 氏

- ・北九州文化連盟会長 26団体 約7000名の会員で構成
- ・青春座（創立70周年）の代表
- ・すべての根っこは北九州が好きだ、北九州を誇りに思っているという気持ち。
- ・文化連盟あるいは青春座を通じて、北九州が日本一の文化の街になりたい。

#### 今川 氏

- ・市民レベルで、文化を担う方々が高齢化してきた。
- ・若者たちが、今まで私たちが考えている文学の範疇とは違う、新しい動きをしている。これをどんどん取り入れないといけない。
- ・子どもたちを啓蒙というか、取っ掛かりを作っていくことが大切。
- ・専門職（図書館を含めて）を、時間をかけて育成していくことが必要。
- ・頂点に立つアーティストの方々の活躍を支えていかなくてはいけない。かつては、「この街に住んでいる方」と気にしている時代があった。現在は、「北九州を愛してくださるアーティストに協力していただく」「共に文化の振興をしていく」

#### 上田 氏

- ・昔から、北九州は情操教育に長けていた。人間力で持っていたところに、施設の力が加わって、より蓄積されてきていると感じる。
- ・市内外、県外で温度差がある。その温度差をどうつめて行くか。
- ・中堅層の力を吸い上げられていないことを感じる。

#### 江口 氏

- ・一昨年、「めんたいぴりり」を北九州市内で撮影した。（地産地消ドラマ）福

岡だけのオンエアから、SNS等で拡散され、全国に広がった。

- ・福岡市内には撮影する場所がない。福岡と北九州はライバルであり、比べがちであるが、福岡から見た北九州の良さを感じている。

- ・FC機能が、素晴らしく優れている。

- ・TOYOTA「G's Baseball Party」をWebムービーで撮った。当初、新宿歌舞伎町で撮影予定であったが、混沌としており撮影できる状況ではなかったため、北九州での撮影となった。YouTubeでは、100万回再生で大ヒットといわれるところを、840万回再生され、国内外でのグローバルヒットとなった。アメリカのメジャーリーグの公式サイトでも、おもしろいと評判になった。「こんなカッコいい小倉の街、見たことない」と言われた。

- ・映像と福岡からの目線で語りたい。

### 柏木 氏

- ・北九州は文化砂漠と言われるが、過去から様々な花を咲かせてきた。市民のポテンシャルの高さではないか。青春座 70 周年ということは、終戦の3か月後に、演劇をやるとうという市民がいたということ。それだけでも、北九州市民の素晴らしさがうかがえる。

- ・文化で北九州の街が元気になって欲しい。

### 近藤 氏

- ・大学は文化をどのように考えているのか。(来年70周年)大学を設置する時、理念を掲げる。その1つとして、地域文化への貢献を明記している。10年前に公立大学法人としてスタートしたが、その時の定款の中にも記載している。

- ・地域社会のセンターとして、文化振興等に関して、「大学は様々な形で地域に貢献する」と設置理念の中で謳っている。

- ・いのちのたび博物館と大学の「博学連携」を始めた。

- ・文化を大切にしたいという想いを込めて、大学を代表しての参加。

### 古賀 氏

- ・「芸術文化を身近に楽しめる環境づくり」をミッションとしているアートサポートふくおかの代表。学校への芸術家の派遣、高齢者施設にアーティストと一緒にいき、体験していただく、一緒につくっていただくという、コーディネートもしている。

- ・長崎の活水女子大では、教員として、文化政策学とアートマネジメントを教えている。

- ・北九州で印象に残っているのは、子育て中のお母さんを対象にした演劇のワークショップに参加したこと。(演劇というキーワードでお母さんが集まってくる。)講師が他の地域でも同事業を実施しており、都市間・地域間の比較ができてよかった。状況の違いが見えた。

・北九州は3人目が産める街。子育てしている人に対してやさしい。これは、ものすごいポテンシャルである。文化芸術で培ったものが、活かされているのではないか。文学、演劇、音楽様々な要素や魅力が詰まっている街、とてもおもしろいところ。それが、外に伝わっていない。同じ県内にいるのに、発信の仕方が違うと受ける印象が違うのか。

### 椿 氏

・音楽の世界に入ったのは、NHKがイタリア歌劇団を招へいして、その様子をテレビで見たのがきっかけ。その衝撃がものすごく素晴らしく、このようなものが世の中にあるのかと感動した。

・島根県で生まれ育った。

・人生の大半をオペラと音楽に費やした。

・ソレイユホールは縁があるところ。以前、藤原歌劇団にいた頃、このホールで、オペラ公演をしたことがある。

・(島根県から引っ越してきて間もないため) 地域のことがよくわからないが、意見を言っていく。

### 津村 氏

・前回の計画も参加。正直、前回も「ものすごくこれでいいのか」と委員の大半が思いながら出来上がってしまった。市民の方に読んでいただいて、理解していただいて、少しでもこの街を面白くしていこうと思ってもらえたらよい。子どもや高齢者・障害者・まちづくり等劇場の仕事が20数年前と考えられないくらいの幅となっている。

・子どもたちに対する教育というよりも育成、芸術が持っている価値観を共有する、答えのないものにどういうふうに向かっているのか。

・子どもたちの接する芸術は進化している。

・北九州芸術劇場は、全国の劇場のトップ15に入っている。兵庫以西で北九州のみ。注目を浴びている。文化庁からも「お願いだからがんばって」と言われている。

・文化芸術が、今、社会の課題にどう向き合っているのかということが重要な時代となっている。

### 三船 氏

・中学校音楽教育研究会北九州市会長。合唱指導、合唱部の顧問として永年携わってきた。

・行政からの支援が手厚いと感じている。

・年長者がパワフル。年長者の合唱の団体が沢山ある。しかし、中間層の活躍が見えない。

・一つひとつの合唱団はがんばっているが、それが繋がっているかという少

し足りない。合唱の土壌が脈々と繋がらないという課題があるのではないか。

### 座長選出（座長挨拶）

・人というのは文化の担い手であるということ。文化というのは、営みとして作ったということ。この文化と人との関係をいかに育てていくかというのが大きな課題。

・文化芸術は、非日常をどういうふうに我々に与え、創造性を育てていくのか、非常に大きなものを感じる。

・隠れたカリキュラムをどういう風にもうまく使いこなすのか。ボランティア活動であったり、キャンパスを出た一つの社会的貢献活動であったり、いろいろな部分がある。これが芸術や文化に直結するであろう。

・文科省が作ったカリキュラムに載っていないところを補助する重要な役割を演じることができるものとして、文化芸術があるのではないか。それをどういう形で次世代に繋げていくか。

### <審議> 課題、今後強めていく取り組み等

#### 三船 氏

・「合唱のまちづくり」という北九州市が目指す形が、中学校の範疇でする中で、イメージできていない。

・北九州市が目指す「合唱の街」の方向性が具体的に見えてくると、中学校、高校、社会人という繋がりが形になる。そして「合唱の街・北九州」を広くPRできる。

・今年、中学校で「合唱フェスティバル」を実施することになり、「スタートライン」というテーマをつけた。「スタートライン」に相応しい曲で、皆が親しみやすい合唱フェスティバルにしていこうと進めている。

・「合唱の街づくり」が目指す形というものを分かりたいし、共有できたらよい。

#### 津村 氏

・文化振興計画の中で、最終的にこの街が何を目指していくのか、結果としてどうあるべきかというものを明確に表現するほうが、読んでいるほうにも分かりやすい。

・工業都市から創造産業へどう移行していくかというテーマがある。

・この街の産業構造の変革というものを、芸術文化においてどう取り上げていくかという項目が、はっきりあってもいいのではないかという気がする。

・2020年の東京オリンピック大会は、完全にひとつの項目として取り上げたほうが良い。

・2020年で終わったら、何の意味もない文化プログラムである。2020年がある種の間地点であり、スタート地点である。

・「子どもたちに芸術文化を」という取組をやっているが、若い人たちが芸術文化を職業として捉えていくときの門を、どう作っていくかにも触れていく必要がある。

・市政評価の芸術文化に関連するのは、ざっと見て21項目ある。単独で考えるのではなく、いろいろなこととの関連を考えていけたら。

### 椿 氏

・人の声はわかりやすく素晴らしい芸術。合唱は音楽を奏でるのに楽器はいらない。扱いやすい音楽の分野である。

・市民が音楽に携わるのは、コンクールを目指しているのではない。レベルアップをすることは大切なことだが、もっと底辺のところ、市民が合唱をして音楽を奏で、それを楽しいと思うことも大事ではないか。例えば、新スタジアムで、市民が何万人も集い、第九を歌うようなことを目指しても面白い。

・この街で何がなされているのか、どんな催しがあるかというのが、部分的にしかわからない。様々なイベントが個々に行われているような感じを受ける。

・「音楽の街」という柱を掲げるのはいいが、それを楽しい、好きと思ってやらなければ広まらない。

### 古賀 氏

・現計画が出来てからの5年間に、国の計画・方針が出たことは踏まえておかなければならない。(文化芸術に関する第四次方針や劇場音楽堂等の活性化に関する法律)これらの国の動きを下敷きにふまえた上で、考えていく必要がある。

・柱の7「芸術・文化によるまちづくり」に5年前話題となったキーワードがちりばめられている。(創造都市・サロン・アーツカウンシルなど)これらの理念や概念は記されているが、具体的な都市像が見えてくるものにはなっていない。

・地域の魅力づくりは、小倉城周辺をまとめるのではなく、北九州市として地域のにぎわいを作っていく、地域経済の活性化等を含めて、芸術文化とリンクさせて考えていくのか、創造都市論を述べるのであれば、産業振興にまでつなげてどう変えるのかという話をしなければならない。

・シビックプライドは重要である。柱2「市民が芸術・文化に接する機会の拡大」に記載されているが、柱7「芸術・文化によるまちづくり」でもよいのではないか。発信していくというものも、「まちづくり」に入れても良い。

・オリンピックに向けての動きを、もっとはっきり打ち出したほうが良い。

### 柏木 氏

・行政が主役の文化振興計画ではなくて、市民が主役という色(ニュアンス)を出したほうが良い。また、行政の立ち位置をどうするのか決める時代が来ているのではないか。

・柱4「芸術・文化の担い手の育成」の中で、文化のプレーヤーや観客はいるが、いちばん不足しているのは、文化をマネジメントする人材。これをどう育成するか。次の時代に受け継ぐには、文化をマネジメントする人を、それぞれの団体に置いていくことが必要。

・情報発信については、北九州の場合、10あるうちの5くらいしか言えていない。発信するだけでいいのかということ、やはりそこにひと工夫いるのではないか。文化のイメージ戦略的な要素がいると思う。

・情報発信が弱いのは、文化をウォッチしたり、モニターする人材がいないから。民間の方がやっている文化イベント等を正当に評価、批評する人がこの街にはいないといつも感じている。そういった人材が是非欲しい。

・文化がここまで発展した以上は、文化でご飯を食べていける人材、そういった産業化をそろそろ目指していければと思う。

・小倉城周辺とは言わずに「小倉を」という風に言っていただきたい。

・働く世代が芸術劇場に来ることができていない。

・学校教育との連携のなかで、単に子どもたちに聞かせるというよりも、先生方の意識、教員に対する芸術教育も大事。答えがない授業をどうやって展開させるかというのが芸術の役割である。

・学校教育のなかに、鑑賞ではなく芸術を使った授業といった視点も是非欲しい。

## 江口 氏

・文化と芸術は違うものだと思っている。そこをきちんと認識しながらやっていくべき。芸術はやはり芸術、ビジネスなどで侵されるべきではない部分も当然あるべき。文化は、営みなので、生活や暮らしやビジネスの部分も入ってくる。

・自分が面白いと思う映像、これには芸術的な部分が入っているが、それをどうビジネス化していくか本当に難しい。その答えは売り先を広くもつということ。例えば韓国。国を挙げて、国策としてポップカルチャーを海外に出していた。かなり前から、様々な人材を中国・香港等に派遣して、現地法人や文化人と飲食を共にし、仲良くなることから始めた。その結果、アジアの人たちは、韓国の歌やファッションが好きになり、テレビを買う時は、パナソニックではなくて、サムソンがかっこいいとなる。このような状況を目指していくには、行政が必要。そうでなければ、文化は行政が主導でやるものではない。

## 上田 氏

・10年後、こういう街にしたいという狙いが、実はこの計画の中であるようではなかった。どこを目指したうえで評価したらいいのかわからない。

・達成できていない部分を洗い出す作業が必要だと思う。

・提案は分かりやすいというのが大事。

- ・7つの柱の上におおきな狙いが必要。
- ・今もっている行政の力と、10年後こういう街でありたいというところをどういうイメージで繋いでいくかという新しい視点や切り口が、後半の5年では必要と思う。
- ・プロデューサーやコーディネーターの育成が必要ではないか。
- ・持っている施設（美術館、現代美術センターなど）で、何をどう目指したいのか。これらを横でつなぐようなプロデューサーを作って、どういう街で何をしたいか、全国へ発信していきたいかという枠組み作りへの目線が必要かと思う。

### 今川 氏

- ・前計画は具体的なところが欠けていた。具体的なビジョンを描いてもよかったのではという反省がある。
- ・文化施設の横の連携が必要。予算の連携など、マネジメントをプロデュースする人材が必要だとずっと思っている。情報を共有しようと言いつつ、できていない。
- ・文学が今までの概念と違っている。赤ちゃんの頃からスマホを使っている世代が成長してくると、かつてのように文学が「生きる糧」のようなそういう位置でなくなっている。未来の文学に向けて、発信しないとイケない。
- ・文学は過去を振り返りがちなので、「先に行く」そういうものも必要ではないか。

### 井生 氏

- ・行政が主役の街はつまらない。
- ・文化活動、芸術活動というのは、基本的には自前でやるべきだと思っている。そこで、行政が下支えをする、そういう形じゃないと継続したものにはならない。一番心配しているのは、行政をあてにしすぎること。
- ・行政が目を見せれば、完全に一体化できるものが放置されている。
- ・事業ごとに出す補助金（助成金）、活動自体に年間とおして出す補助金（助成金）があるが、これが妥当かどうか、このあたりで見直す時期になっているのではないかと思う。